

雨の日の綻び

「くそっ……ついてないな……」

初夏。昼過ぎまではうだるような暑さだったが、夕暮れ時に急に青い空に雲が浮かんだかと思うと、強い夕立になった。

ざあざあど強い雨が降り、若い刑事——城田壮はマンションのロビーに駆けこんだ。

(全く……マンションのロビーで雨宿りなんて……俺は何やってるんだ)

捜査としては失格だし、何より独自に調べるといえるのは良くない事かもしれない。

だが——調べる物は調べなければ。

彼は胸ポケットから写真をとりだし、映っている人物を眺めた。

彼女が、白浜正二の妻。

艶のある茶髪で、豊かに波打つ長髪が背中まで伸びている。すらりと伸びた四肢。律儀に身体の前で組まれた手の指は美しい。壮より、若く、そして大人の色香にも満ちた女性。

比奈玲子。

彼女の小さな顔と長い睫毛、ぱっちりとした瞳に、右目の下にホクロがアクセントになっていた。通った鼻筋、柔らかく肉が盛り上がった肌を見せる頬と、赤く塗られたリップの艶が強調された小さな唇は美しいの一言で、十人が十人美人と呼ぶであろう事は疑いない女性だった。

微笑むと、秘密を隠していそうな笑みを浮かべる。

六十を超えていた白浜正二と結婚し、わずか一年後、彼は事故死する事になる。莫大な資産は遺言状によりほぼ全て彼女の物——

勿論疑いはなかった。でも証拠は無く、彼女は美しい笑みと共に捜査を切り抜け、気付けば迷宮入りになるうとしている。

だがそこに壮は何かひっかかりを覚えていた。

涙も見せず、取り調べもその不思議な笑みで淡々とこなしていった女。

先輩には「出会って一年なんだから、返って真実味がある」と言われたが、壮は素直に夫に何の興味もないのではないかと疑った。勿論、名探偵でもない新人に事故死で決着しようとしている事件をひっくり返す力はない。でも——

彼は、新人らしい純粋な正義感と、刑事ドラマでありがちな「勘」に導かれるように、彼女を疑っていた。

(そもそもなんで白浜さんを選んだんだ。こう美人ならもっと若い金持ちなんかいくらでもいたはず——)

そう言っただけはもう一度彼女の写真に目を落とす。

美しい顔や結婚相手の特異性より、彼女の分かりやすい特徴といえる物が一つある。

それは顔から少し視線を下に落とした先にある——

「刑事さん？」

「えっ？」

不意に後ろから声がして、壮はとっさにポケットに写真を仕舞った。

「あら、そんなに慌てなくてもいいじゃないですか」

微かに甘い香りがして、壮は目の前の女性の顔を見た。

写真に写っていた彼女がそこに居た。

「奥さんですか……真後ろで声をかけられると、さすがに驚きます」

「ごめんなさい。私も今気付いた所なんです……まあ、濡れてますわ」

「あ、いやこれは……」

「最も、私も濡れてしまいましたけど」

そう言っただけで笑った彼女の身体も、濡れていた。茶髪は細い首にしつとりと絡むように濡れ、白の半袖のブラウスに黒のミニスカートも肉体のラインに張り付いている。

ハイヒールを履くむっちりとした脚は濡れて白く輝き、黒のバックをかけている半そでのブラウスから伸びた腕も細く、美しかった。

につこりと柔和に笑った彼女の、薄く開かれた目に浮かぶ睫毛が艶っぽい。

「今日はいらっしゃる日でしたか？ それならちゃんと準備しましたのに」

「大丈夫です。そうではないですよ。偶々通りかかったから……」

「なら良かったです」

玲子は自分が濡れているのも気にせず、覗き込むように壮に一步近づき、見上げてくる。

ユサツ……

「っ……！」

とっさに彼は目を逸らした。つい視線が誘導され、そこにいつてしまったから――

「？ どうしたんですか？ 刑事さん？」

「い、いや……なんでも」

首を傾げた玲子は気付いていないのか、笑みを崩していないが、一度意識するともう止められない。

彼女の一番の特徴、それは――

おっぱい。

出るところは出て、締まった所は締まっている――そんな彼女の肉体でいて、一番大きく、目立って止まない場所。

大きく実った乳房に、くびれたウエストと締まったヒップの所為で、余計に胸が強調されてしまう。ブラウスは悲鳴を上げるみたいにパツンパツンで、まさにたわなに実った大人の色香だった。壮は乳フェチというわけではない。でも、玲子の美しさにこの反則サイズの乳房は、男として目が引かれなれないといったら嘘になる。

「ちよつと水滴が目に入って」

目を擦る仕草をして、切り抜ける。

「そんなに濡れていらっしやるものね」

少し歩くと、まるで大きさを誇示するみたいに柔らかく揺れた。

(黒かよ、もう……)

今日に限っては雨に濡れているから、特大サイズのブラまで透けて見えた。ブラウスの隙間から見える鎖骨の下の強烈な盛り上がり、ちらちら見える深く柔らかそうな谷間が目に見える。

「大丈夫ですか？ さ、早くどうぞ」

「えっ？」

「えっ、つて。ここにそのままいたら風邪を引いてしまいますわ。私より濡れてるし、タオルくらいは貸しますから」

彼女はそれが当然と言わんばかりに微笑んだ。その笑みに邪気は見えず、さらにくしゃみが出てしまった。

「ほら、くしゃみが」

「いや、けれど一応ですね……」

「でも今日はお仕事ではないんでしょ？」

「それは、そうですね」

「なら、どうぞ」

玲子はそういうと、歩き出し、オートロックを開けた所で振り返り、微笑んだ。妖艶とも言える微笑みに、しばし壮は立ち呆ける。

拒絶する事も出来た。普通なら、帰るべきだっただろう。

だが、

(折角来て、何も得ないで帰っても仕方がないか……?)

「わかりました。なら貸して下さい」

職場にバレた時の事を考えたくなかったが、彼なりの熱意がその一步を進ませた。探偵物でも、わりかしよく容疑者の所へ刑事は足を運ぶ。

「シャワーも使ってくださいね」

「さすがにそれは……!」

オートロックを踏み越えるなり、玲子から飛び出た言葉に思わず壮はうろたえる。

「久しぶりのお客さんですもの。特に刑事さんは年が近いし、話しやすくて嬉しいです」

その言葉に壮は言葉を詰まらせてしまう。それを承諾ととったのか、玲子はエレベーターの扉を開けると促すように手を伸ばして来る。

(……しようがない……!)

「奥さんより年下ですが、俺は刑事ですからね」

「ふふ、わかっています」

ここまで来たなら、堂々としていよう。一々うろたえていては、舐められてしまう。

「……」

エレベーターに乗った時に、比奈玲子が小さく冷たい笑みを浮かべた事には、壮は気付かなかった。

*

玲子の持っているマンションは、市内の駅前から少し離れた所にある高層マンションだった。エレベーターを随分昇ると、広々とした一室にたどり着いた。

「こんな所に別荘なんて、本当に愛されていたんですね」

「そうですか？ けれどももう自宅には戻れないし、ここが私の家ですよ」

若干嫌味が混じった壮の言葉にも、柔和な微笑みを返してくる。

「さ、お先にどうぞ」

もはや何も疑う事なく、玲子は壮が風呂に入る物だと思つて脱衣所への扉を開けていた。近づいた拍子に、たわむように玲子の巨乳が揺れ、腕で寄せられた谷間がシャツ越しに見せつけられる。

ズキッと、ペニスズボンの中で自己主張しているのがわかった。

何考えてんだ、俺。

比奈玲子は夜の人間だった。どうやって知り合ったのか、なんとなく想像は着く。

否定するつもりはないが、結果が結果だ。

「ありがとうございます」

さつさと出よう。出たら少し話を聞いて帰る。昔の交友関係を当てるべきだ。

ささやかに自分をドラマの主人公と重ねるような高揚を作つて、気まずさを掻き消した。

「広いな……」

脱衣所は広く、大き目の洗濯機が置かれている。扉と向かい合う様にした鏡が大きかった。別荘とはいへ普通に生活できる一式は揃つており、女性用の歯ブラシや櫛、高級なドライヤーなどが見えた。けれど、タオルがない。持つてきてくれるのだろうか。

「でも男物がない……」

ここに正二は来た事がないか？ そう言えば先輩も「ここは女に買い与えられた家だろう」なんて言っていたが、こういう所からもそれが疑われる。

愛し合っていたなんて、本当なのだろうか？

玲子の証言がどうも嘘くさいと壮は感じていた。

やっぱり何かあるんじゃないか――

彼はあの不思議な笑みを思い出しつつ、そう感じていた。

さつさと風呂に入って、終わらせよう。壮は決めると濡れたスーツを脱いでいく。

「つくぞ、もう」

素早くパンツまで脱いでしまうと、恥ずかしくも玲子の乳房を見て勃起してしまっていた自分のペニスと対面した。

容疑者だぞと自分に言い聞かせるが、あの美貌とおっぱいはAVでもめったにお目にかからない女である事は認めるしかない。

濡れて身体の起伏が目立った彼女の姿は、エロティックだった。

(正二さんに隙がなかったと言えば嘘になるな。身体だけで選んで……)

六十を超えていた正二は、とても玲子のような若い美女と付き合えるような男性ではない。勿論外見だけで人を判断するべきじゃないのは男性も一緒だが……、

「刑事さん？ すみませんタオルを……」

「えっ?!」

その時脱衣所の扉が開き、タオルを持った玲子が現れた。壮の心臓が強く高鳴り、一瞬動きが止まってしまう。

「……あら」

それは玲子の方も同じだったらしく、ドアノブに手をかけたまま立ち呆けて壮の股間に視線を向けていた。

おっぱいに反応して勃起してしまったペニスが、比奈玲子に見られている――

「す、すみません!」

口から謝罪の言葉を飛び出させて、股間を隠すようにして後ろを向いた。タオルが無い事に気が付いて、洗濯機の影に隠れる。

(なんで俺が謝ってるんだ! この……!)

「あ、あの……!」

すぐに扉を閉めるだろうと思っていたが、扉が締まる音がしない。

不審に思った壮が顔をあげ、目の前の鏡に視線を遣ると玲子の姿が映った。

「……」

彼女の視線は、鏡越しに壮のペニスへ注がれていた。鏡越しでは当然彼のペニスを隠す物など何もなく、玲子の視線はまっすぐに彼のペニスに突き刺さる。

咄嗟に手で隠して声を上げる。

しかも、見間違いでなければ、彼女は勃起した壮のペニスを見て微かに笑っていた。

その冷たく美しい笑みに見つめられているとわかった瞬間、ペニスが跳ねる。

恥ずかしさで顔に火が付くのがわかった。

「ごめんなさい。私は全く気にしていませんから」

だが玲子は壮の動揺には気付かぬ様子で床にタオルを置くと、静かに扉を閉めた。

壮の心臓の高鳴りだけを残して、再び沈黙が訪れる。

(くそっ。今のはなんなんだ……!)

半ば乱暴に浴室のドアを開き、中に逃げるように入った。

しばらくして息が落ち着いてくると、増々疑わしい気持ちが増して来る。正二の死因は事故死だ。単独での交通事故であり、毒物を盛られたというわけでもない。彼女がやったという証拠はない。

それでも、納得する事は出来ない。

気を落ちつける事も目的で、少し強めにシャワーのノズルを捻る。心地の良い暖かさやわらかく頭に降りかかるお湯に、高められてしまっていた気持ちが静まっていく。

だが、彼のペニス依然として勃起したままだった。

玲子の得体の知れなさは深まってくるが、美しさという意味では何度会っても変わらない、いやむしろ、増しているような気さえしてくる。

その考えを心の中で言葉にした瞬間、再びペニスが強く脈打つ。

さっさと終わらせよう。そう壮が心に決め、シャワーを止めようと手を伸ばし――

その時、ガチャリと扉が開いた音がして壮は振り返った。

「刑事さん、お風呂は如何ですか？」

「なっ――？」

そこには、白いバスタオルをその身体に巻き付けた玲子が立っていた。

なぜ、どうして――そんな言葉が出る前に、壮は思わず玲子のバスタオル姿に目を奪われてしまっていた。

彼女の茶髪は微かに濡れていた。美しい顔は小さく目を細め、あの妖艶な笑みを浮かべている。タオルの下からでも、抱きしめたくなくなるような腰のくびれや締まって上を向いた尻の肉付きは手に取るようにわかった。

そして壮が何より目を奪われてしまったのは――たわわに実った彼女のおっぱい。

玲子の胸はそのサイズに反して垂れる事はなくツンと前を向き、ぎりぎり乳首が見えないかというくらい白い素肌を晒していた。

少しきつめに巻き付けられた所為で、むっちりとしたI字の谷間が見せつけられるように壮の視界に入る。柔らかく、甘さに満ちたような。

少しでも無理に動かせば、途端にあのタオルは落ちておっぱいが見えてしまう――

そこで、気絶させられていた理性が戻ってくる。

「なっ、何考えてるんですかっ……!!」

とっさに身を翻して、出っっぱなしのシャワーを壁掛けに戻した。

「何って、刑事さんと同じ事ですよ？」

「え……？」

どうすればいいのかわからず混乱する壮とは対照的に、玲子は彼を静かに見つめ、そっと壮の背中に忍び寄る。

息を吸う時間を与えられる前に、壮は背中に柔らかい物が押し付けられたのを感じた。

(こ、これ——玲子の、おっ——?)

そう思った時、玲子の白い腕が壮の前に回され、指がギュッとペニスに絡みついて来た。玲子の指の、すべらかな柔らかい感触がまとわりつく。

「あっ……?」

突然の快感に、壮は両手でシャワーを握ったまま、背をビクつかせる。

「ふふ。もうこんなに勃起させてるじゃないですか……」

壮のペニスの感触を愉しむかのように軽く揉みながら、玲子は壮の耳元で囁いてくる。柔らかい玲子の指に握られると、ペニスが脈打った。

「刑事さん、エッチなんですね」

「ど、どこを触ってるんですか……!」

事態についていけない壮だったが、玲子の艶めいた囁き声と体温を背中に感じると、これが現実なのだと思え入れるしかなかった。

声を出そうとしたが、柔らかな十指がゆつくりとペニスを揉みこんでくると、思わず声が裏返ってしまう。

玲子は壮の声にクスリと笑うと、右手の親指と人さし指で竿を挟み、壮のペニスの大きさや形を確かめるかのようにゆつくりと扱いてくる。

そのまま、左手の指で袋を優しく揉まれてしまう。

「っあ……」

その感触に、熱のこもった息が漏れた。

「ふふ……可愛いです」

玲子の指に触られた場所が熱を帯びたようにジンジンと疼き、脚がガクつく。

ニギニギと試すような手コキだけに、玲子の指は甘美な快感を響かせてきた。

——比奈玲子に手コキされている——

この状況が壮の背を痺れさせ、快感を増しているのだろうか。

「こ、こんな事して……奥さんは……!」

鏡越しにすごもうとしたが、玲子はそれを見ても笑みを崩すことはなかった。

「あら、こんな事って何ですか?」

「バカにしてるんですか! こんな……ああ……?!」

不意に指で亀頭を強く押し込まれ、語尾が消し飛んでしまう。むにゆりと押し付けられた巨乳の感触を感じ、強くペニスが脈打つ。

「そうですか? 非番の日に容疑者の女の家を訪ねる刑事さんと私、どちらがただで済まないでしょうか?」

「俺は、事件を調べて……あっ……!」

袋を揉みこんでいた指が、不意にアナルとの境目を撫でてくる。

柔らかな指にツツ、とくすぐるように撫でられた。

ぞわりと背筋に快感が走って、情けない顔を玲子に見つめられてしまう。

「今ここで騒ぎになれば……皆は私と刑事さん、どちらを信じますか？」
笑みを浮かべた玲子の言葉の意味を理解した時、壮は目を見開く。

「お、俺がお前を襲ったと……!?!」

「未亡人になった女性の弱みにつけこんで……まあ、なんてひどい刑事さん」

言い返したいが、玲子にもし「襲われた」なんて証言をされてしまえば、きつと皆それを信じてしまうだろう。ある事ない事でっちあげられてしまつて、最悪は逮捕。

彼女の美貌が、それに説得力を持たせてしまう。

言い返す事が出来ず、壮は歯ぎしりする事しか出来なかった。

「それに、全てが嘘というわけでもないですよ？」

玲子は悔し気な壮の顔に、クスクスと笑つた。

そして艶のある唇を舌で舐め、首を傾げて熱を持つ口を耳元へ寄せて来た。

その妖艶な様に、肌が粟立つ。

「だって刑事さん、ロビーで私のおっぱいの事熱心に見てましたもの」

「っ……そんな事っ……」

「透けていた私のブラも見て。刑事さんの視線はわかりやすいですから……」

(ば、バレて……)

口が思わず開き、顔に火が出たような錯覚に陥る。

確かにあの時、俺はパツンパツンの、濡れていた彼女のブラウスを盗み見て……

玲子に握られている、壮のモノが脈打つた。

「あら、ふふ……」

それがわかつたのか、玲子の小さな嘲笑が響く。

これじゃ認めているような物じゃないか。

だがその危惧を覚えた時には既に、壮の顔は玲子の微笑に見つめられていた。

笑みだけで言葉はなかったが、その沈黙が壮の心臓を高く鳴らせた。

その恥ずかしさに俯き、壮は唇を嚙む。

(ど、どうしたら……俺は……)

この女は容疑者で、俺は刑事——!

目を閉じれば全てが無かつた事にならないか、そんな風に思っているかのように壮は強く目を閉じた。

だが——

「うあつ……」

しばし沈黙が支配していた浴室に、壮の荒い吐息が響いた。

「ふふ、起きてくれて嬉しいです」

玲子の指はペニスの固さを確かめるかのように蠢いたかと思うと、不意に竿を包むように握りしめ、柔らかな掌でグニユグニユと亀頭を揉みこんできた。

その指使いに、壮は思わず声が漏れてしまう。

くすぐるようにカリ首を細い指が這い回り、裏筋を優しく撫でられ袋を揉みこまれる。そのむず痒さに壮が身をよじらせようとした瞬間、根本から強く抜きあげられた。

粘っこい涙が鈴口から溢れて、壮の顎が跳ね上がった。

その下のマグマが昇ってくるのがわかる。でも腰を震わせても、玲子の豊満な肉体も、艶めかしく絡みついた指も離れる気配を見せてくれない。

「気持ちいいですか？ 刑事さん？」

愉しむような玲子の声が響き、壮は咄嗟に首を振る。

玲子は微笑むと、掌で亀頭を柔らかく包みカウパーで濡れた竿を根本まで抜き下ろす。

敏感になった亀頭から根本まで、玲子の指に優しく包まれ、ぞわりとした快感が走る。

玲子はもう片方の手で同じ蠢きを繰り返し、両手でひたすら上から下へ抜き下ろしてきた。

「うあぁっ……」

柔らかい指でヌルヌルとペニスを撫でおろされ続ける快感に、力が抜けて腰が震えてしまう。ヌルヌルの筒にとペニスを突き入れているみたいだった。

玲子はその動きに目を細めると、身体を寄せ、柔らかくて濡れた肌を押し付けてくる。

禁忌の事態に快感を覚えてしまっているという自覚も相まって、壮の頭の奥は熱を帯びていた。

「強情ですね、可愛い……んっ」

大きなおっぱいの柔らかさを教え込むように身体をよじって、むにゅむにゅと押し付けてくる。

壮はガクガクと腰が震えて、シャワーに縋り付くかのように一歩前に進んだが、玲子は決して離してはくれなかった。

「……お前、何なんだ……」

壮も、人並みに女性経験はある。

だが玲子のペニスを弄ぶ指使いは、経験したどんな女性よりいやらしく、立ち振る舞いにはゾツとするような妖艶さに満ちている。

「あら、酷いです。人を悪魔か何かみたい……少しだけ年の離れた男性と結婚しただけの普通の女性ですよ？」

「普通の女は、こんなっ……っぁ……!!」

「自分を取り調べた刑事さんのオチンチンを扱かないですか？」

その声に合わせて、上から下に続いていた指の動きが急に変わり、絞るように根本から抜きあげられた。

今までで一番大きく、情けない声が壮の口から漏れた。

「あら……白くてねっとりしたのが混ざってますよ？ 気持ちよくないんでしょう？」

指でカリ首を握られたまま、クチュクチュと音を立てて、白く細い指が鈴口を撫でまわして来る。カウパーにまぎって漏れた白濁の液を指に乗せて糸を引かせる。

その糸を見せつけられ、壮の顔は手からそれた。

その瞬間、その指で乳首をきゅっと絞られた。

「ひああっ……」

壮の声が跳ね上がる。

「ふふ、こつちも苛めてあげますね」

そのままクリクリと乳首を撫でまわされ、摘まむように愛撫された。



くすぐるように乳首の周りと突かれてから、ぷつくりと膨らんだ乳首を指でクニクニと弄んで来る。

細い指が焦らすように胸板を撫でから、再び勃起した乳首を摘まれる。

その指使いに声が漏れ、あつという間に乳首に痺れが広がって熱を帯びる。

さらに玲子は休ませていた。ペニスを握る指も動かして来た。

指が乳首を強く潰した時、勃起したモノをギュッと扱き上げられる。

「つああっ……!!」

解放を求めたマグマが、奥から一気に昇って来たのがわかった。

腰が、痙攣するように勝手にヒクつく。

咄嗟に奥歯を強くかみ合わせ、首を何度も振った。

まずい。この女にイカされてしまうなんて、そんなの絶対駄目だ――

「もう。可愛いです……」

玲子は唇を噛んで耐える壮の顔を見て微笑みを浮かべた。

白く柔らかな指がクニクニと動き、袋を揉みまわされる。

さらに腫れた乳首が親指と人差し指でつまみ転がされ、白く柔らかな指の腹で揉み込むように潰される。

壮の力が抜け声が漏れてくると、クチュクチュクチュクチュ……と、優しくペニスを扱ってくる。

(な、なんだよこれっ……こんなのお……ああ……！)

必死に我慢しようとしているのに、乳首への責めとおっぱいの柔らかさでグズグズにされてしまう。グズグズにされた所を柔らかい指で扱かれると、我慢の仕方がわからない。袋が引き攣って、精子がドンドン溜まっていくのがわかる。

美しい容疑者の手管に、壮の息は荒くなる一方だった。

口を半開きにして涎を垂らす壮の顔を鏡越しに見た玲子は、淫らに微笑む。

「こつちも……」

「あつ……はあつ……ひあつ……？」

首筋を犯すように、柔らかい舌が伸びて来た。

ピチャピチャと音を聞かせるように、ゆつくりと舐め上げ、うなじの周りを焦らすように舐めまわして来る。

ぞわりぞわりとしびれが広がり、緩んだ顔がさらに緩む。

そこで乳首を押し倒され、モノを根本から扱き上げられると、一段弾んだ嬌声が響いた。

気付けば壮は、容疑者の巨乳美女に淫らな三点責め——おっぱいを押し付けられ、舌を這わされ、乳首を弄ばれてペニスを扱かれて——を施されていた。

助けを呼べば自分が犯人だと思われ、逃げ場はない。

その自覚が壮の背筋を震わせ、いやらしくペニスに絡みつく指の快感を増幅させていた。

「……刑事さんはいつまで持つかしら……」

「っ……！！」

玲子のささやきに壮は首を振るが、同時に、ある一つの事に思い至る。

(け、刑事さんへは?)

つまり、俺以外の男にもこうやって淫らな行いを——?

「あら、刑事さんは優秀なんですね。危ないです」

鏡に映る壮の顔に変化があったのか、玲子は笑って胸板に指を這わせ、反対側の乳首を愛撫し始める。

さらにペニスを扱く親指と人差し指で輪っかを作り、グチュグチュと音を立てて根本から扱きたててきた。

新たな快感に、壮は腰を引かせるように震わせた。

「刑事さんが今考えた事は、フィクションの中だけの事ですよ」

でも、玲子は壮のペニスを逃してくれなかった。

ヌルヌルの指を絡ませると、粘ついた水音を浴室に響かせる。

しびれは頭の奥まで広がり、もう涎を垂らしている事にも気づけない。

「それか、ふふ……」

ふやけた思考回路に、クスクスと妖艶な笑い声が響いた。

「このままオチンチンを苛められたら……私に調教されてしまうと思いませんか？」

「え——？」

玲子に、俺が——？

否定をする前に、壮の勃起したペニスが隠し切れずに小さく脈打った。

「あ、あるわけないだろ！ 奥さん、一体っ……ああっ……！」

早く言い返さないと、壮の意識が玲子への反論に注いだ悪魔のようなタイミングで、玲子の手は再び乳首を這い回りはじめ、ペニスを根本から抜きあげ始めてきた。

玲子の指が締め、響く水音が早くなっていく。

明確にイカせる動きに変わった手つきに膝が震え、荒い息が浴室に響き渡る。

「そうですね……ごめんなさい。気持ちよくないんですから、当たり前ですね」

乳首を責めていた白い指が胸板をくすぐりながら、ゆつくりと股間へ降りて来る。

降りて来た白い指に袋をキュッと握られ、ヒクついた竿を抜かれる。

壮が力を込めて耐えようとすると、今度は袋を甘やかすように揉みまわされてしまう。

内股にゾワリと痺れが広がって、力が抜けていく。

そこを二本の指で摘まむように竿を握られ、クチュクチュとゆつくり抜かれる。

そのまま指が昇って来て、亀頭を弄ぶようにクニクニと摘まんできた。

「ふああっ……あっ……ひああっ……！」

壮はその責めに甘えたような声を漏らして、玲子の白い指に揉み込まれる亀頭からは、糸を引いた涙がゆつくりと滴った。

必死に我慢しようとしても、身体の力は抜けて行き、ペニスの緊張だけがズクンズクンと高まっていく。

玲子のクスリとした笑い声が耳に入って、壮は顔を赤くした。でもむにゅんとハリのある乳房が背中を滑ると、腕から力が抜けてしまう。

「大丈夫ですか、刑事さん？」

「はあっ……はあっ……」

我慢出来ない快感に、荒い息を付く。もはや耳にうるさい程に抜き立てられる卑猥な水音。壮は禁忌の絶頂へ押し上げられているのがわかった。

絶頂の寸前で屈辱と快感に耐え続ける壮を見て、玲子は愉しそうに笑う。

「……お返事できませんか……可愛いです。刑事さん」

口の中で聞こえないように言葉を残すと、壮の乳首を弄んでいた指をそつと離し、自身の肉体を包み込んでいたタオルの結び目に指を入れた。

目を閉じていた壮は、ばさりと重みのある物が浴室の床に落ちた音で、目を開いた。

タオルだ。白いタオルが、広がっている。これはつまり……

「ごめんなさい。少し熱中してしまっただけです」

玲子の声で鏡を見ると、先ほどまで白いタオルに包まれていた所に、眩しい玲子の肌があらる事に気付いた。

壮の背中に隠れていたが、たわわに実っていた巨乳の横乳がはみ出るように鏡に映っている――

その事に気付き呆けた表情を浮かべる壮を見て、玲子は淫らに微笑んだ。

むにゅんと、再び強く玲子の乳房が押し付けられる。

先ほどまでと違って、温かく、柔らかい。スベスベして……

(ああ……ああ！)

俺の背中に、玲子のおっぱいが直に押し付けられてる――！

壮がそれに気付いた時、玲子の手を握られていたペニスは激しく脈打った。

まるでそれを合図にしたかのように、玲子の指が一気にスピードを上げた。

陰のうをサワサワと揉みほぐしながら、わっかを作り音を立てて抜く。

その状態でむっちりとおっぱいを動かされると、せりあがってくる迸りを止められなかった。みっともなく顎を上げ、荒く息を吐く。

「さ、たっぷり出してくださいね。刑事さん？」

追い打ちをかけるようにその耳元で熱っぽく囁かれ、首筋を舐められたのが合図だった。迸りが、玲子の細く白い指のひらめきに降参したみたいに昇ってくる――！

「……ああっ！ ダメっ、出っ……ああっ――！！」

若き刑事は、モノを美しい容疑者の両手に囚われたまま、腰を激しく震わせ緩んだ叫び声を上げた。

固く勃起していたペニスが激しく震え、射精と共に解放感と背徳感が稲妻のように駆け巡る。

薄く色のついた浴室のタイルを汚すように、白濁の液が飛び散っていく。

「ふふ、すごい量……」

クスクスと笑い声を漏らしつつ、玲子は責めは辞めるどころか、苦し気にビク着くペニスを、ギュッと握りしめて抜いて来た。

「ま、まだイッて……あああ――！！」

ガクガクと膝を震わせシャワーにしがみ付きながら、脈動のように精を放っていく。

「こんなに射精して……私を調べてるんでしょう？ 良いんですか？」

意地の悪い質問を耳元で囁きながら、ペニスへの責めは緩めようとはしない。

壮は何度も首を振った。

良くない。絶対に良くない。それなのに。玲子は容疑者だ。こんな事は絶対にあってはならない。あっちゃいけない。

なのに、でも――

それがわかるとペニスはむしろ震えを増し、精を放つ勢いを強めた。

「全然止まってないですよ？ ほら、頑張ってください」

頑張れと言いながら、玲子は袋を揉み、ペニスを親指と人差し指で挟むように扱ってくる。まるで何かを絞り出すような乱雑な扱きだったが、強めの一撃は、脈打ちを続ける今の壮には腰砕けの快感だった。

悪辣な笑みに、背筋が熱っぽく震えるのがわかる。腰が震え、幾たびも精を放つ。射精の感覚とはお構いなしに扱き立ててくる指使いに、ジンジンとペニスが熱を持っていつてしまふ——

こんなの、止められるわけがない。いつしか壮は屈辱と快感の中で、自身のペニスを扱きあげてくる指の動きが止まる事だけを祈るように待っていた。

それが裏を返せば、玲子の指使いを味わっている事になっている事にも気づかず——

「ふふ、たっぷり味わって……病みつきにしてあげます」

その小さな声は、快楽に陥落した新米刑事には届かなかった。

「くはあつ……ああつ……」

やがて経験した事もないような長い射精を終えると、玲子の肉体がゆつくりと離れていく。その場にへたりこんだ壮は、自身がまき散らした精子の多さに打ちのめされながら、射精の余韻に浸っていた。

（ああ……俺……）

一体、何てことに。俺は。

「今日の事は秘密にしてあげます。シャワーを浴びたら、お帰り下さいね」

顔をあげる余力すら残っていない壮の頭の上から、そんな声が響いてくる。ひたひたと浴室から出ると、ドアが閉じられた。

何も考える事が出来ず、しばらくその場にへたり込む。

しばらくの間、そうして壮は虚脱感と屈辱感にまみれながら息をしていた。

起き上がった後、一体どう振る舞えばいいのかもわからずに——

*

やっぱり、彼に狙いを定めていたのは正解だった。

その夜、玲子は一枚の写真のリビングの机の上に置き、笑みを浮かべた。

壮は玲子が浴室を出てから十分以上経ってから、逃げるように飛び出して出て行った。彼にクビや誤解を恐れずに被害を訴え出る力は、きつとないだろう。

それよりも事件の証拠を見つけて、私を捕まえようとするはず。

どちらにせよ、始まったばかりで、愉しみはまだまだこれからだ。

「愉しいけど……正二さんったらもう」

だが、同時にこの事態を招いた老人——かつての夫でも、この程度の印象だった——に嘆

息する。確かに正二は今までで金銭的に一番の「上物」であり、入念に賤けてしまったため何か先走ってしまう事はあり得た。だが、まさかこんな事になるなんて。

二人の関係が完全に明るみに出してしまえば不味いし、前妻の息子もずっと私を疑っている——

現に証拠は無くても警察は玲子を疑った。何度も家に警察が来たし、取り調べに呼ばれて何度も聴取された。

だが証拠がないのだから結局は戻される事を繰り返している、前妻の息子はともかく、警察は段々と疑いを弱めていった。彼女が署まで呼ばれたのはもう一か月も前の事だ。

(そろそろ解放されるかしら)

だがそこで、ずっと玲子を疑っていた刑事が居た。一番若く、その若い正義感ゆえに証拠が無くても玲子の事を疑い続けていた刑事。

『少し待ってください。今の所をもう一度教えてくれませんか』

——それが城田壮だった。

若く、鍛えた身体は引き締まっっていて女性にもモテそうで、それでいて青い正義感をきちんと持ち合わせていた。彼のような主人公のような人間からしてみたら、玲子にかかっている疑いは到底許すことは出来ないだろう。

そして彼の疑いは正しかったのだ。

自分自身のために他人は尽くせばいいと思っていて、特に男なんて皆私のおもちゃではない——比奈玲子はそう考えていた。それに彼女の美貌は今までずっとそれを証明し続けて来たし、これからもそうに違いない。ありとあらゆる男から貢がせ、弄び、愉しんでいた。若く有能な男をいつか困りたいと思っただけはいるが、それはまだ先の事で——

だが、彼のような人物に疑われてしまえばずっと疑いが晴れず、時間とありあまるほどの富を楽しめないのではないか。彼女の人生で、初めての危機。

玲子は厄介な事になったと思ひ、内心唇を噛んでいた。

(あら……)

だが取り調べを受けていた時、彼女はある一つの事に気付く。

正義感に満ちた若い刑事。だが時々——彼が気が緩んだ瞬間や、玲子が姿勢を変えた時に——彼の視線がちらちらと胸に注がれている事に気付いたのだ。

他の男のように、わざとらしく目を逸らしたりはしない。身体や目線の動きで仕方なく、そんな雰囲気を出しながらだったが、ひよっとしたら他の男より私の胸に惹かれている。

玲子はその事に気付いた。

正義感や職務への精神から隠してはいるが、彼も男。小さな綻びも、そこから毒を流し込み男を利用して来た玲子から見れば、それは大きすぎる隙だった。

彼さえ堕としてしまえば、私は自由の身になる——

初手をどうしようかと思っていたが、彼自身の失態によって最高の毒を仕込む事が出来た。彼がどんなに正義感に溢れた好青年、そう、主人公のような男の子であっても——

「それに今日は、とても愉しかった……次はどうしようかしら」

すぐに溺れる男どもと違い、彼は最後まで自分の正義感を捨てていなかった。だからこそ快感が倍增してしまったのだろうが、でも、今までで最高の獲物。

比奈玲子が笑みを浮かべて眺める写真。

——そこには、今日の風呂場でのワンシーンが収められていた。